

氏名(本籍)	韓	玲	姫	(中 国)
学位の種類	博	士	(学 術)	
学位記番号	博	甲	第 6648 号	
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	図書館情報メディア研究科			
学位論文題目	周作人における日本文化受容の研究			
主	査	筑波大学教授	博士(文学)	綿 拔 豊 昭
副	査	筑波大学教授	博士(文学)	松 本 浩 一
副	査	筑波大学教授	博士(法学)	松 縄 正 登
副	査	筑波大学教授	修士(工学)	西 岡 貞 一
副	査	青山学院大学教授	修士(文学)	廣 木 一 人

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、周作人が特に影響を受けたと考えられる日本文化を取り上げ、周作人の日本文化の認識と受容のあり方について論じたものである。

第1章では、基礎的研究として周作人が日本留学後に購入した日本の書籍に着目し、周作人の和書購入書籍の傾向と日本文学志向について論じた。今回の調査で、周作人が日本留学から帰国した後の1912年から日記が現存される1934年まで、合わせて、1,336冊の和書を購入していたことがわかった。そして、周作人が購入した和書の中で最も多いジャンルである「文学」をさらにジャンルわけして分析した結果、周作人の日本文学志向が詩歌、小説から古典文学へと変遷したことがわかり、それは五四新文化運動における周作人の主義主張から、芸術に対する趣味世界へと変わったことによることを明らかにした。

第2章では、周作人が購入した詩歌の書籍のうち、最も多いのが俳句の書籍である。そこで俳句に着目し、五四新文化運動における周作人の俳句の翻訳紹介と、1920年代中国文壇で広まった小詩運動とのかかわりについて考察した。周作人の新詩の創作は1919年から1923年まで集中している。それらの新詩の題材はすべて平凡なものであり、散文的な形式と平凡な内容をもって当時の思想を表したところは、伝統詩にはない新しい発見であった。周作人はまた、1916年から日本の俳句を次々と翻訳し、俳句の普遍性と日本詩歌の歌心を中国文壇に伝えた。それを契機に中国文壇で小詩運動が広まったことを明らかにした。小詩運動と俳句の影響については、1922年と1923年に出版された小詩を取り上げ、俳句の受容について検証した。その結果、小詩には周作人が俳句翻訳の際に使われていた季語、切れ字の翻訳方法、簡潔な表現で余韻を残す表現が多いこと、そして小さいものに対して描いた詩がたくさん創作されていたことなど、俳句の影響を受けていたことが明らかになった。

第3章では、俳句翻訳の中で周作人が多く取り上げた小林一茶に焦点を当て、周作人が入手した小林一茶研究のテキストを整理し、彼の一茶への共感と一茶の蠅の句を通して形成された一茶像を考察した。1921年に書いた「蒼蠅」という詩と1924年に書いた「蒼蠅」というエッセイにおける周作人の思想の変化について述べ、周作人の作品は一茶の「蠅」観に触発されたものであり、彼の思想の変化において一茶の影響が

大きかったことについて論じた。特に一茶に共感したのは、普通の人のように苦しむ一茶の人間らしいところが、周作人の唱えた「人の文学」、「平民の文学」の要求に応えるところが多かったことを明らかにした。

第4章では、周作人が購入した和書の中に『日本情史』、『変態性欲論』、『両性問題の研究』、『恋愛価値論』等のように、恋愛、結婚、性に関する書籍が多いことに着目し、周作人の女性観と日本の女性思想の影響について考察した。まず、文学活動初期には単に封建倫理道德に対する批判と女性自らの覚醒を呼びかけるに留まっていたが、日本留学後は次第に女性の経済的独立と性の解放を唱える周作人の女性思想の変化について言及し、周作人の女性観の変遷において、与謝野晶子の影響が強かったことを明らかにした。そして、周作人の唱える「人道主義」は、単に人を哀れ、人に恩恵を与えるのではなく、「個人」に即した「人間本位主義」であり、周作人の「人の文学」は結局霊肉一致した女性本位主義であることを論じた。

第5章では、周作人が1924年から日本の古典文学を多く購入したことに注目し、最も大きな影響を受けたと考えられる「兼好法師」に焦点を当て、『徒然草』の一部を翻訳した『『徒然草』抄』を通して、周作人の『徒然草』受容と、それが周作人の思想にいかん影響を与えたかを考察した。周作人が自分の受けた日本の影響で「最も顕著なのは兼好法師だ」と言ったのは、「禁欲家と快楽派」の兼好の趣味性に共感したからであり、「私は寂寞のゆえに、文学に安らぎを求めるといったように、人生の岐路でさまよう時に最も安らぎをもたらしてくれたのが、兼好の閑寂の趣味観であったからだと考えられる。つまり、周作人が小林一茶に共感したのが「凡人の悲哀」だとすれば、兼好に共鳴したのは、人間の悲哀を楽しむ趣味世界であり、このような趣味性が生活情趣について語る周作人の「小品文」に与えた影響が大きいことを明らかにした。

第6章では、帰国後周作人が注目した日本文化の中に郷土研究、民芸、江戸風物、浮世絵などの江戸庶民文化があることに注目し、周作人が浮世絵を通して読み取ったのは、浮世絵の審美的工芸的な美というよりも「東洋人の悲哀」という精神的な価値であり、『滑稽本』を通して見たのは、日本独特のユーモアの趣味と、江戸の下町などを背景とした江戸の庶民の生活を描いた人情であったことを明らかにした。

審査の結果の要旨

五四新文化運動において、中国新文学に大きく貢献した文学啓蒙家の一人である周作人は、日本文学を積極的に中国語に翻訳、紹介し、西洋と日本の新思想、新文学を中国文壇に広めた一知識人として、かつては実兄魯迅とともにその名を揚げており、戦前の日本文壇においても「日本文学通」として知られていた。しかし、中国と日本が戦争したおりに対日協力したため、終戦後逮捕され、その後、彼の文学は「漢奸文芸」として30年間中国文壇で取り上げられず、中国では多くの知識人や研究者が意識的に避ける存在となっていた。1979年9月に中国で日本文学研究会が設立したことを契機に、80年代に入って、周作人研究が再び復活する。

中国の事情により、30年間もとりあげられなかったが、近代における日本と中国の文化交流を考える上で、日本の文化等を積極的に中国に紹介するなどしている周作人は看過できない人物であり、研究対象として取り上げる価値があり、それをとりあげた本論文は意義のあるものである。

先行研究では、思想家としての周作人について論じるものと、周作人と日本との関わりについては、永井荷風、夏目漱石、武者小路実篤など特定の作家との関係についての研究がなされている。しかしながら、周作人に関する基礎資料となる『周作人日記』を詳しく分析していないため、実証的とは言い難い言説が少なくない。本論文は、その『周作人日記』を丹念に読み込み、どのような書籍を入手したかを明らかにしている。先行研究には根拠のない推論がなされたりしたが、実際にその書籍を読んだかまでは明らかにできないものもあるものの、入手していたことが明らかになることによって、そこから知識を得たり影響を受けた可能性は高いものとなる。それを根拠にした推論は、信憑性の高いものとなる。

また、周作人の日本文学の受容を考えるにあたっては、どのテキストで読んだかは見過ごすことのできない基礎的調査である。特に古典文学の場合、周作人が日本語に堪能であったとしても、注釈書を参考にしなかったとは考えがたい。先行研究ではその点が明らかにされておらず、原文を読んだうえでの解釈なのか、注釈者の解釈なのか問題とされていない。本論文は、たとえば小林一茶の作品や『徒然草』を、周作人がどのテキストで読んだ可能性が高いかを調査した上で論じている。その点においても信憑性が高い。

第1章では、周作人が日本留学後に購入した日本の書籍に着目し、周作人の和書購入書籍の傾向と日本文学志向について論じている。周作人が日本留学から帰国した後の1912年から日記が現存される1934年まで、合わせて1,336冊の和書を購入していたことを明らかにし、それを内容によって分類して、それを分析している。その結果、日本文学志向が詩歌、小説から古典文学へと変遷したのは、五四新文化運動における周作人の主義主張から、芸術に対する趣味世界へと変わったからであると論じた。

購入したからといって必ずしも読むとは限らないので、今後、傍証となる資料の発見が望まれるが、現在、公になっている資料からすれば、妥当な結論といえる。

第2章では、周作人が購入した詩歌の書籍のうち、最も多い俳句に着目し、五四新文化運動における周作人の俳句の翻訳紹介と、1920年代中国文壇で広まった小詩運動とのかかわりについて考察している。新詩の題材はすべて平凡なものであり、散文的な形式と平凡な内容をもって当時の思想を表したところは、伝統詩にはない新しい発見とすること、小詩には周作人が俳句翻訳の際に使われていた季語、切れ字の翻訳方法、簡潔な表現で余韻を残す表現が多いことなど俳句の影響を受けていたことを明らかにしている。新詩、小詩を丹念に読み込んだ上での分析であり、首肯される。

第3章では、小林一茶に焦点を当て、周作人が入手した小林一茶研究のテキストを整理し、彼の一茶への共感と一茶の蠅の句を通して形成された一茶像を考察し、江戸時代の平民文学とされる俳句の中でも、特に一茶に共感したのは、普通の人のように苦しむ一茶の人間らしいところが、周作人の唱えた「人の文学」、「平民の文学」の要求に応えるところが多かったことを明らかにしている。中国では嫌悪される「蠅」に注目したところに新しさがあがり、その結論も首肯される。ただし、明治時代、日本ではさほど注目されていなかった一茶に、なぜ周作人が注目したのか、それは誰かの指導などによるものか、といった課題は残る。

第4章では、周作人が購入した和書の中に、恋愛、結婚、性に関する書籍が多いことに着目し、周作人の女性観と日本の女性思想の影響について考察し、周作人の女性観の変遷において、与謝野晶子の影響が強かったことを明らかにしている。その結論は納得できるものであり、周作人の思想を考えるうえで重要なことを明らかにしている。

第5章では、周作人の「『徒然草』抄」がどの段を訳し、それに共通するものなどを分析することによって、周作人の『徒然草』受容と、それが周作人の思想にいかん影響を与えたのかを考察し、兼好に共鳴したのは、人間の悲哀を楽しむ趣味世界であり、このような趣味性が生活情趣について語る周作人の「小品文」に与えた影響が大きいことを明らかにしている。首肯できる結論である。

第6章では、帰国後周作人が注目した日本文化の中に郷土研究、民芸、江戸風物、浮世絵などの江戸庶民文芸があることに注目して考察を加えている。周作人が「浮世絵」を通して読み取ったのは、浮世絵の審美的工芸的な美というよりも「東洋人の悲哀」という精神的な価値であり、「滑稽本」を通してみたのは、日本独特のユーモアの趣味と、江戸の下町などを背景とした江戸の庶民の生活を描いた人情であったことについて論じている。一茶や『徒然草』と異なり、「浮世絵」「滑稽本」はジャンルの名称で、描かれたもの、書かれた内容には多様性があるため、結論もおおまかなものになっている。今後、細部にわたる調査をもって確かなものとする必要があるが、その結論は妥当なものと思われる。

本研究は、周作人についての基礎資料ながら、専攻研究が部分的にしか取り上げなかった『周作人日記』を丹念に調査・分析し、それによって得られたデータを用いた実証的で研究方法も妥当であり、中国におけ

る日本文化の研究に寄与するものと、審査委員全員一同評価した。これらを総合して、本論文は博士論文として十分な内容をもつものと判断される。

平成 24 年 11 月 30 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き「図書館情報メディア研究科博士後期課程の学位論文の審査に関する内規」第 12 項第 2 号に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。